



# 敬老バス改悪に待った



「上限設定・自己負担導入」の改悪見直し案は延期！  
高齢者、市民の運動が市の思惑に待ったをかけた



札幌社保協 事務局次長  
**齐藤 浩司**

札幌市長が昨年突然言い出した「敬老バスの見直し」は広報を使った宣伝や、誘導的なアンケート実施で、市の思惑通り自己負担導入等の改悪が通るかと思われました。しかし「札幌敬老バスを守る連絡会」などの改悪に反対する運動が広がる中で、市の案は市議会でも同意を得られず、今年10月からの見直し実施を断念という結果になりました。

## 高齢者の怒りと運動の高まり

「札幌敬老バスを守る連絡会」は一二月五日、九〇人が参加し市議会各会派へ請願賛同の要請を行い、それまで集めた一万七〇〇筆の署名を議会へ提出しました。同一二日には四〇人以上が上田市長に直接会つて「私のひとこと」という生の声をまとめたものを渡し、「現行通りの存続」を要請しました。また「敬老バスを守ろう！ 市民集会」には、連絡会加入団体や老人クラブなどから予想を超える二三〇人が参加し、マスコミも多数取材する中で「敬老バスは今の制度のまま守ろう」という熱気あふれる場になりました。

市側は「毎年二億円ずつ増える財政的負担は続けられない」という財政難の宣伝をしましたが、連絡会がビラ配布や街頭宣伝、署名などを進める中で「高齢者の足を大切に」「敬老バスの精神を守れ」「財政問題を言ふのであれば見直すべきところは他にたくさんある」という主張が、市民への共感となっていました。一月の初冬の街頭宣伝にも多くの市民が足を止め、高齢者だけでなく若い人も署名に応じてくれました。

- 四年一月の現行制度の存続を求める請願の趣旨説明には一八〇人を越す傍聴者が詰め掛け、委員会室に入りきれず廊下にあふ

れ、敬老バスへの関心の高さと改悪への強い憤りを議会に示すものになりました。

市は一月に「五〇〇〇人市民アンケート」を行い、その結果を一月に公表しました。内容は「見直しが必

要、いくらかの負担はよい」という結論に誘導しようというもののだつたにもかかわらず、七〇歳以上の敬老バス利用者の五四%が「現行のまま」と回答しました。アンケートは市の思い描く結果にはならなかつたのです。

## 市長さん、老人の姿を見ていますか

「上田市長様、あなたはバスや地下鉄に乗つたことがありますか。老人の姿を見ていましたか。バスや地下鉄に乗つて病院に通う老夫婦の姿を。『敬老バスは私たちの命の綱です』絶対に今の制度を変えることは反対で

す」——これは今年一月一二日の敬老バスを守る西・手稲区連絡会の集会で、西区の七二才の女性が市長への手紙を読み上げたものです。

多くの高齢者の生活は大変つましいものです。白石区のTさん（女性、七四歳）は、冬になると敬老バスを使って街なかへ行き、暖房の効いたデパートなどで一日過ごし、暗くなると家へ帰つて早々に寝るのだそうです。「そうすれば電気代や灯油代がかからな

いからね」と言うTさんにとって、通院や街へ行く足としての敬老バスは必需品なのです。

「一定の負担は理解を得られた」と市長はさかんに言い始めました。が、高齢者の多くは「市が大変なら少しでも」という善意でそう答えていました。年金は下がるにもかかわらず、介護保険料や国保料、医療費の自



己負担も引き上げられるなど高齢者の生活はきわめて厳しいものです。本音は敬老バスも「今ままが良い」のです。今年一月の請願・陳情の趣旨説明の際、及び一月の市主催公開討論会の際に、市老人クラブ連合会の代表は負担導入を容認しながらも「心情としては現行のままが多数」と述べていました。

### 「上限設定、自己負担導入」 案に市民・議会も反発

三月議会で市は「タタキ台」として「自己負担平均三〇〇〇円、利用上限一三〇〇〇円のプリペイドカード方式」という案を提示しました。しかしこれは多くの高齢者の反発を招き、負担は仕方がないという方々をも敵にまわすことになりました。

第一にこの案は「三〇〇〇円程度を払つて割りのいいプリペイドカードを買う」というもので、「多年にわたり社会の発展に寄与してきた高齢者を敬愛し…」という敬老バスの精神とは無縁のものになること、第二に上限の設定は、住んでいる地域によつて利用額に差が出るため不公平を生むこと、第三に一部負担を認めていた人の大半は、「いくらか払つても今まで通りのフリー・バス」を想定していたためです。

それまで連絡会の「現行制度を守ろう」

という主張に距離を置いていた人たちからも反応が出

始め、新たに署名を集めてくれる人も現れました。

「上限を決めるのはひどい」「街なかの病院へ行くのに往復で一〇〇〇円以上かかる。

これでは月二回の通院の交通費にもならない」と言つた声が続々と連絡会に寄せられました。



連絡会では三月に、累計四万三〇〇〇筆の署名と共に再び市議会各会派への要請と、一〇〇件以上の「私のひとこと」を持つて市長への申し入れを行いました。特にこの時は「現行制度の存続」と同時に「早急に決めずもつと市民の間で議論を」ということを要請しました。

一二〇人の傍聴者を前にした市議会厚生常任委員会の質疑では、現行制度の存続を主張する共産党以外でも野党の自民、公明党が「すぐに決めず一年間議論すべき」と言

# 敬老バス改悪に待った

い出しました。また与党の民主や市民ネットからも「上限は低すぎる、上限設定はいかがなものか」等の異論が出る事態になりました。結局、高齢者の大きな怒りに押された議会の思惑もあり、三月議会で決着と考えて市側のシナリオは変更を余儀なくされたのです。

## 「延期」は運動の大きな成果

五月の下旬に、新聞報道で「敬老バス見直し見送り」のニュースが流れました。四月の市による新たな意見聴取でも、自己負担容認は多かつたものの、利用上限に反対が全体で四四・一%（七〇歳以上では五〇・七%）を占めるなど、市提案には批判が多かつたのです。交渉を進めていた民間バス事業者とも調整がつかず、ついに実施を見送ることになりました。

五月二六日の市議会厚生常任委員会で、市は正式に一〇月の敬老バス更新時からの「見直し実施」をあきらめ、二〇〇五年から実施したいと表明しました。委員会終了後、連絡会の交流会に集まつた各地・各団体の参加者からは、「断念ではないが、延期は私達の成果」「延期せざるを得ないところへ市を追い込んだ」等、今回の結果を前進的に受けとめる声が多く出ました。

## 「延長戦」で新たな局面を迎えた敬老バス

六月一八日に「札幌敬老バスを守る連絡会」は七七人の出席で総会を開催し、案内を出した市内老人クラブから一四クラブ（連絡会未加入が一〇）の代表も参加しました。見直し延期の成果を全体の確信にしながら、

①市民合意を得られない見直し案は白紙撤回を求める、②一〇月実施を断念した以上、

敬老バスは今まで通り一年間で発行することを求める、ことを確認。同時に老人クラブ連合会など高齢者団体、バス事業者との話し合いをもち、各団体と共同できるようであれば一致点で運動を進めることも確認しました。

市長は民間バス事業者との合意

五月二六日の市議会厚生常任委員会で、市は正式に一〇月の敬老バス更新時からの「見直し実施」をあきらめ、二〇〇五年から実施したいと表明しました。委員会終了後、連絡会の交流会に集まつた各地・各団体の参加者からは、「断念ではないが、延期は私達の成果」「延期せざるを得ないところへ市を追い込んだ」等、今回の結果を前進的に受けとめる声が多く出ました。

## 敬老バスは高齢者の生きがいの足

議会各派も延期を受けて、一定の手直しがあれば容認する方向に傾き始めました。実際に市は九月議会へ向けて、利用上限設定を議会で了承してもらうよう新たな提案を準備していると言われ、予断を許さない状況です。



敬老バスは「敬老」の精神が問われ、福祉のあり方が問われました。財政難といえば何でも負担が導入され、増やされるのでは福祉制度はなくなります。敬老バスは高齢者の健康・暮らし・生きがいの足です。札幌の敬老バスは使い勝手のよさも他市に誇れるものです。川崎・名古屋市等で今年度から敬老バスの有料化、自己負担導入がされました。が、それに右ならぬではなく、高齢者が少しでも暮らしやすい街づくりをどうするのかを市長は考えるべきです。

高齢者の活力を奪うような敬老バスの改悪では、「高齢者や障がい者が地域で自立した生活を送ることができるよう」（市長の元気ビジョン）はならないでしょう。